

史跡 生日古墳群

－ 保存整備事業 発掘調査概要報告書VI －



2 0 0 6

宮崎市教育委員会

序

国指定史跡生目古墳群は、平成10年度から保存整備のための確認調査を進めてまいりました。

古墳群内には100m級の前期の前方後円墳を九州で唯一3基備え、調査以前から、注目されていました。

今回、報告いたします平成15年度、16年度の調査結果では、前方後円墳に地下式横穴墓が伴い、さらには埋葬の主体までも地下式横穴墓を採用している可能性があることが分かりました。これらの結果は新たに生目古墳群の特徴として加わっただけでなく、今後、南九州の古墳時代研究を行っていく上で、重要な資料になることは過言ではないでしょう。

生目古墳群は平成20年度の史跡公園の開園を目指し、現在事業を進めております。これら貴重な資料を適切な方法で保存し、広く市民の方々に啓発し、そして、個人個人にこれらの資料を郷土の誇りとして持っていただくために、私たち教育委員会職員は担うべき役割は非常に大きいものだと感じているところでありますし、そういった史跡整備を行っていきたいと思っております。

今後本報告書が古墳研究の一助となり、活用されますことを願っております。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成18年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内 藤 泰 夫

例 言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴う平成15年、16年度の発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成15年12月1日～平成16年3月31日、平成16年10月1日～平成17年3月31日の期間実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。

4. 調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会		
(15年度)			
文化振興課	課長	小掠	聖
文化財係	係長	田村	泰彦
調査事務	主任主事	富永	智美 (旧姓 今井)
〃	主事	松木	勇道
調査員	主任技師	稲岡	洋道
〃	嘱託	門田	奈津子
(16年度)			
文化振興課	課長	小掠	聖
文化財係	係長	米良	明信
調査事務	主事	松木	勇道
調査員	主任技師	稲岡	洋道
〃	嘱託	井上	誠二
補助員	〃	稲元	久美子
(17年度)			
文化振興課	課長	野田	清孝
文化財係	係長	米良	明信
調査事務	主任主事	松木	勇道
調査員	主任技師	稲岡	洋道
〃	嘱託	井上	誠二
補助員	〃	稲元	久美子
〃	〃	永友	加奈子
〃	〃	徳丸	理奈

5. 本書の執筆は稲岡が行った。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は稲岡・門田・井上・稲元・永友・徳丸が分担して行った。
7. 現場及び遺物写真撮影は稲岡・門田・井上が分担して行った。空中撮影は、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
8. 本書の編集は稲岡が行った。

本文目次

第Ⅰ章	生目古墳群の概要	1
	1. 調査に至る経緯	1
	2. 古墳群周辺の歴史的環境	1
	3. 平成15年度・16年度の調査の概要	6
	4. 跡江丘陵の基本層序	6
第Ⅱ章	7号墳の調査	8
	1. 調査以前の環境とこれまでの調査の状況	8
	2. 平成15・16年度の調査結果	9
第Ⅲ章	8号墳の調査	19
	1. 調査以前の環境とこれまでの調査の状況	19
	2. 平成16年度の調査結果	19
第Ⅳ章	10号墳の調査	22
	1. 調査以前の環境	22
	2. 平成16年度の調査結果	22
第Ⅴ章	14号墳の調査	23
	1. 調査以前の環境とこれまでの調査の状況	23
	2. 平成15年度の調査結果	24
第Ⅵ章	22号墳の調査	27
	1. 調査以前の環境	27
	2. 平成16年度の調査結果	27
第Ⅶ章	結語（これまでの調査のまとめと今後の課題）	33

表目次

第1表	生目古墳群高塚古墳一覧	4
第2表	生目古墳群地下式横穴墓一覧	5

挿図目次

第1図	生日古墳群位置図	2
第2図	生日古墳群高塚位置図 (1/5,000)	3
第3図	跡江丘陵基本層序模式図	7
第4図	7号墳周辺15・16年度調査区位置図 (1/1,000)	9
第5図	7号墳周辺全体図 (1/300)	11・12
第6図	18号地下式横穴墓周辺図 (1/60)	13・14
第7図	18号地下式横穴墓竪坑土層断面図 (1/40)	13・14
第8図	7号墳周辺出土遺物① (1/4)	17
第9図	7号墳周辺出土遺物② (1/4)	18
第10図	8号墳周辺出土遺物 (1/4)	21
第11図	10号墳土層断面図 (1/60)	22
第12図	15年度14号墳調査位置図 (1/900)	23
第13図	14e 出土遺物 (1/4)	24
第14図	14号墳全体図 (1/300)	25・26
第15図	22号墳全体図 (1/500)	29・30
第16図	22A・22C 調査区図 (1/100)	31
第17図	22号墳張り出し部断面図 (1/100)	32
第18図	22号墳出土遺物 (1/4)	32
第19図	生日古墳群調査区及び指定地図 (1/2,500)	35・36
第20図	生日古墳群遺構配置及び指定地図 (1/2,500)	37・38

第 I 章 生目古墳群の概要

1. 調査に至る経緯

昭和18年	前方後円墳7基、円墳36基の計43基が国指定史跡を受ける。(9月8日)
昭和36～38年	上ノ迫土地改良事業により、一部の古墳が削平され、消滅及び形状が変化。
昭和37年	古墳標石、道標石、説明版の設置等の整備が行われる。
昭和50・51年	『生目古墳群保存管理計画策定所』、航空測量による地形図作成を行う。
昭和57年	古墳群約14haを対象とした境界点測量を実施。
平成5年	「宮崎市制70周年記念事業」の一環として(仮称)宮崎市総合スポーツ公園並びに生目史跡公園建設事業が取り上げられる。
平成5～7年度	国庫補助事業で、生目古墳群周辺遺跡発掘調査を実施。
平成8年7月	生目古墳群史跡公園整備委員会が発足、基本構想・基本計画策定にあたり、計5回の委員会を開催。
平成9年度	『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』作成。土地公有化開始。
平成10年度	国庫補助を受けて史跡整備に伴う発掘調査開始。

2. 古墳群周辺の歴史的環境

生目古墳群は大淀川下流右岸、宮崎市跡江地区に位置する東西約1.2km、南北約1.2kmの長靴の形を呈した丘陵上に立地している。丘陵上は東側からは宮崎市街地が一望できる。丘陵の北西側は最高点44.4mを測る急峻で複雑な地形を呈している。古墳群の大半が立地する南東側は標高25～30mの比較的平坦な地形を呈している。丘陵全域は照葉樹林地で、混ざってスギが植林される。事業開始前の古墳群内は畑地、ココスヤシの苗圃として利用されていた。

古墳群は現在跡江丘陵上に前方後円墳7基、円墳20基、丘陵下に2基の計29基の高塚古墳が所在する他、発掘調査等で確認された円墳7基、横穴墓9基、地下式横穴墓30基により構成される。丘陵上に造営された高塚古墳及び地下式横穴墓のうち、1、2、旧2～4号墳、地下式横穴墓の6基は、跡江丘陵北側に谷を挟んで対峙する独立丘陵に立地する。

古墳群の史跡指定以前の資料としては、昭和16年に原田仁により100m級の前方後円墳である1・3・22号墳の実測図が作成されており、また地元には戦前に作成された古墳案内略図(徳地一作図)が存在し、この絵図には台地上に前方後円墳8基、円墳30基が記されている。

昭和49年には、前年に破壊された3号墳後円部西側の4基の横穴墓の追跡調査が行われ、須恵器、土師器、貝釧、耳環、馬具類(轡、貝製雲珠)、鉄鏃、刀子等が出土した。

昭和58年には丘陵下の城平地区に所在する41号墳の確認調査を実施。調査の結果、径5m、高さ1.5mの円墳の周囲に幅50cmの周溝が巡ることが確認された。

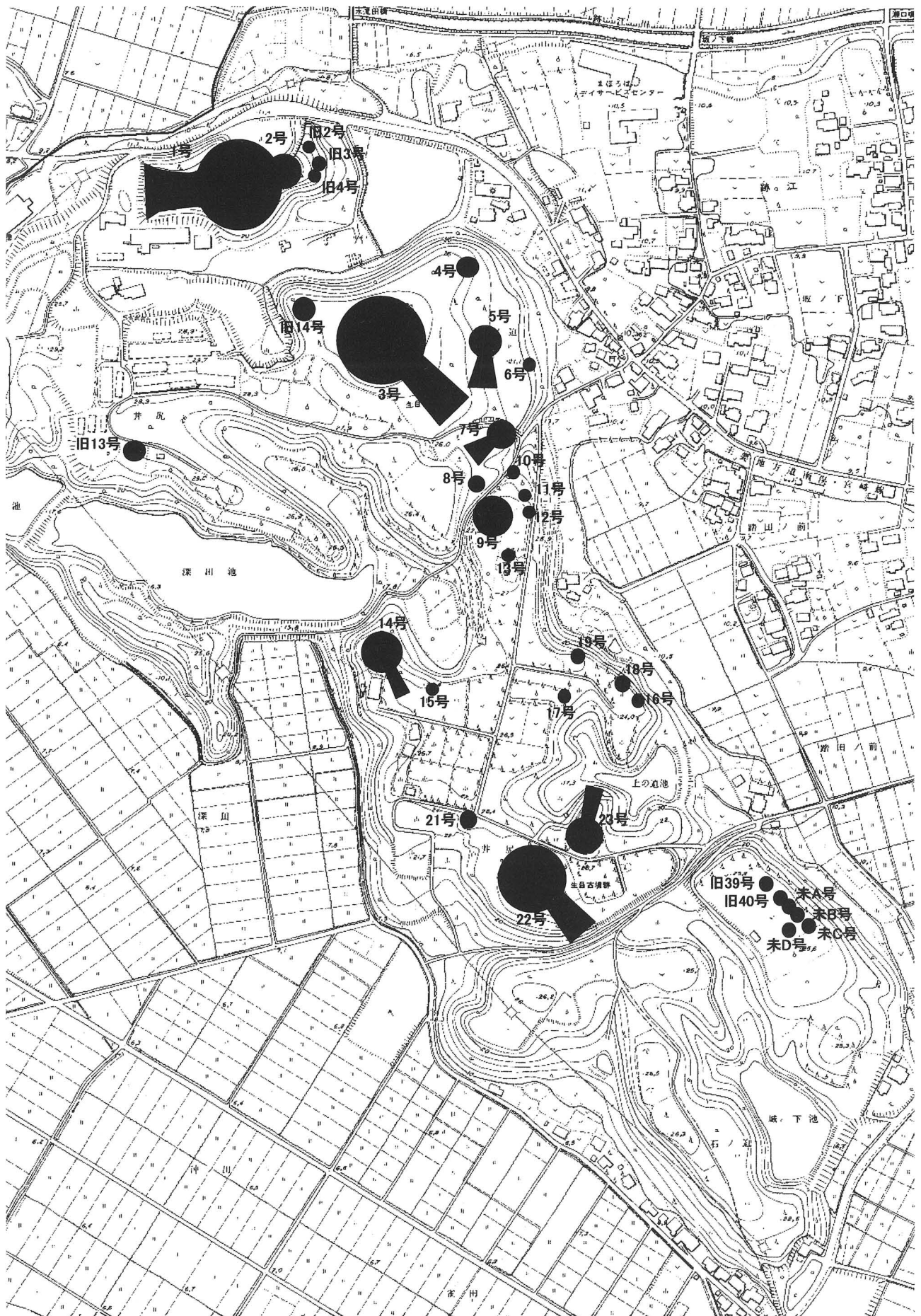
平成5～7年の生目古墳群周辺遺跡発掘調査では前方後円墳である5・14・22号墳周囲の調査を行い、22号墳では、壺形埴輪片が出土した。また、所在不明となっていた旧2～4号墳の調査を行い、その位置を確認した他、地下式横穴墓8基、土坑墓6基を検出した。この他、13号墳南側、17号墳西側で円形周溝墓が検出され、丘陵東南部では環濠集落の存在が確認された。

平成8年には宮崎大学考古学研究室により3・5・7・14・22・23号墳の前方後円墳6基とその周辺の円墳の墳丘測量図が作成された。

平成9・10年には石ノ迫第2遺跡の調査が行われ、平成7年度に確認された環濠集落の環濠内側の居住域に該当する。弥生時代中期と後期後葉の集落が確認され、竪穴住居35軒等が検出され、集落廃絶後には土坑墓43基が構築される。所在不明となっていた国指定旧39・40号墳の周溝を確認した他、新たに中期から後期にかけての円墳4基が検出され、うち3基は地下式横穴墓を埋葬主体としていた。地下式横穴墓は計5基が検出されている。



第1図 生目古墳群位置図



第2図 生目古墳群高塚位置図 (1/5,000)

第1表 生日古墳群高塚古墳一覧

現 No.	旧 No.	墳形	規模 (m) 長×円径×高	規 格	葺石	出土遺物	備 考
1	6	前円	136×86×17		有		
2	5	円	27				
3	17	前円	143×88×12.7	後円部3段、 前方部2段	有		後円部上段に中世?の 薬研堀の溝が巡る
4	18	円	21		無		
5	19	前円	54×29×4.4	後円部2段、 前方部2段	有	円筒埴輪?、壺形土器、高坏	周溝外側で19号地下式 横穴墓を確認
6	20	円	8		無		
7	21	前円	46×24×3.9	後円部2段、 前方部2段、 造り出し有	有	土師器(甕、壺、椀、高坏)、須恵 器(坏、高坏、ハソウ、把手付鉢、 大甕、脚台付壺、筒型器台、石製垂 玉、石製小玉、石製紡錘車	後円部中心に向かっ て、18号地下式を構 築、その他周溝内から 8基、周溝外から4基 の地下式横穴墓を確認
8	22	円		無段地区	無		周溝内に2基の地下式 横穴墓
9	25	円	34				
10		円	11				
11	23	円	10				
12	24	円	12				
13	26	円	11				
14	27	前円	63×38×4	後円部?、 前方部2段	有	壺形埴輪	周溝内より22号地下式 横穴墓を確認
15		円	11		無		
16	30	円	16				
17	32	円	14				
18	29	円	17				
19	28	円	15				
21	35	前円?	19	後円部2段	無		周溝内より20号地下式 横穴墓を確認
22	34	前円	101×60×9.2	後円部3段、 前方部2段か?	有	壺形埴輪、土師器甕、高坏、壺	周溝内より、張り出し 部、23号地下式横穴墓 を確認
23		前円	57×30×4.9		有		
	2	円	10				
	3	円	11				
	4	円	14				
	13	円	19				
	14	円	20		無		
	15	円	17				
	39	円	16		無		
	40	円	14		無	壺形土器	
	41	円			無		
	42	円	5				
未A		円	10.5		無		11号地下式を埋葬主体
未B		円	9.5		無		12・13号地下式を埋葬 主体
未C		円	17		無		
未D		円	10.5		無		14号地下式を埋葬主体

第2表 生目古墳群地下式横穴墓一覽

No.	全長	玄 室				時 期	出土遺物	構築位置	調査内容
		奥行	幅	高	面積				
1	—	—	—	—	—		—	2号墳周辺	竪坑確認
2	1.3	0.4	1.5	0.3	0.6			3号墳外堤	完掘
3	—	—	—	—	—		鉄斧	7号墳周辺	竪坑確認
4	—	—	—	—	—		—	7号墳周辺	竪坑確認
5	—	—	—	—	—		—	7号墳周辺	竪坑確認
6	—	—	—	—	—		—	7号墳周辺	竪坑確認
7	1.1	0.6	2	0.45	1.2		鉄鏃、ヤリガンナ	9号墳周辺	完掘
8	1.6	0.9	1.8	0.45	1.6	5 c 中葉	鉄鏃、刀子、鉄斧、鉄鎌	9号墳周辺	完掘
9	—	—	—	—	—		—	15号墳南東約50m	竪坑確認
10	1.8	0.8	2.1	0.5	1.7			未指定A号墳周辺	完掘
11	1.3	0.4	1.75	0.4	0.7	6 c 後葉?		未指定A号墳周溝内	完掘
12	1.9	0.9	2.1	0.85	1.9			未指定B号墳周溝内	完掘
13	2.5	1.2	1.95	0.7	2.3	6 c 中葉?	鉄鏃	未指定B号墳周溝内	完掘
14	1.4	0.4	1.72	0.45	0.7	6 c 後葉?		未指定D号墳周溝内	完掘
15	1.9	0.8	2.3	0.7	1.8		鉄鏃	3号墳周溝内	完掘
16	—	—	—	—	—		—	旧14号周溝内	半載
17	—	—	—	—	—		刀子	7号墳周溝内	玄室半載
18	—	—	—	—	—	5 c 前葉	—	7号墳周溝内	調査中
19	1.95	0.7	1.95	0.6	1.4	5 c 前葉	鉄鏃、竪坑より高坏	5号墳周溝外側	完掘
20	—	—	—	—	—			21号墳周溝内	調査中
21	—	—	—	—	—	6 c 初頭	封土上より土師器出土	7号墳周溝内	封土検出
22	—	—	—	—	—			14号墳周溝内	調査中
23	—	—	—	—	—			22号墳周溝内	平面検出
24	—	—	—	—	—	6 c 初頭	封土上より土師器出土	7号墳周溝内	封土検出
25	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	平面検出
26	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	平面検出
27	—	—	—	—	—			8号墳周溝内	封土検出
28	—	—	—	—	—			8号墳周溝内	封土検出
A	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	封土確認?
B	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	竪坑検出?
C	—	—	—	—	—			7号墳周溝内	竪坑検出?

平成10年からは整備に伴う確認調査を開始した。

平成10年度 (1998年度) - 3・4・5・6号、旧14号墳

平成11年度 (1999年度) - 3・5・7号墳

平成12年度 (2000年度) - 3・5・7号、旧14号墳

平成13年度 (2001年度) - 5・7・8号墳

平成14年度 (2002年度) - 5・7・14・15・21号墳

平成15年度（2002年度）－5・7・14号墳、8号墳西側広場と7号墳墳丘のレーダー探査
平成16年度（2003年度）－5・7・8・10・22号、8号墳西側広場、旧15号墳、9号墳周辺のレーダー探査

3. 平成15年度・16年度の調査の概要

【平成15年度】

5号墳は主軸ラインの土層確認用ベルトとそれに直行する前方部、後円部の土層確認用のベルトを除去した。7号墳は北側前方部前面墳丘及び周溝、前方部側面及び周溝、後円部南側1/4墳丘及び周溝、墳丘主軸上の前方部南側側面墳丘から周溝外縁にかけて幅1.5mの調査区を調査した。後円部平坦面では1/4を調査し、墓壙の掘方を確認した。前方部北側側面側周溝内では周溝外縁の立ち上がりを利用して21号地下式横穴墓を確認した。後円部南側の周溝では後円部の中心に向かって構築する18号地下式横穴墓の一部を確認した。14号墳は東側隅角を面的に調査した。前方部側面の斜面を確認し、前方部前面に周溝が巡らないことが確認された。また、隅角に近い前方部側面側の周溝外縁付近では、22号地下式横穴墓を確認した。地中レーダー探査は8号墳西側の広場と7号墳墳丘部分の地中レーダー探査を行った。8号墳の西側広場では、一帯の地下遺構の確認のために行い、広場南西側で前方後方形の反応が見られた。7号墳は埋葬形態確認のために行い、後円部南側の周溝内で強い反応が見られ、その後の調査で18号地下式横穴墓の竪坑であることが解った。

【平成16年度】

5号墳は前方部前面側の平場に調査区を設定し、前方部前面側には周溝が巡らないことを確認した。7号墳は後円部平坦面で墓壙の確認を行い、東西7.2m、南北6.0mの大型の墓壙が推測される。周溝内からは5基の地下式横穴墓（24～28号）が確認され、平成6年に確認された4基（3～6号）もその位置を確認した。後円部南側の周溝の外側では未確認の墳丘を確認した。8号墳は墳丘が無段築であり、墳丘斜面には葺石を葺かないことが確認された。墳丘の南西側には、幅約2.5mの周溝が残り、周溝内で地下式横穴墓（29号、30号）を確認した。

10号墳は墳丘でないことが解った。旧15号墳は面的な調査区を設け、空中撮影の結果、単純に円墳ではないことが明らかになった。22号墳は前方部東側面の周溝部分で溝に囲まれた造り出し状の張り出し部を確認した。周溝外縁では23号地下式横穴墓が確認された。市道南側の調査区の高まりは墳丘でないことが判明した。8号墳西側の広場は平成15年度の地中レーダー探査で、前方後方墳の存在を指摘された部分の確認調査を行ったが、前方後方墳は確認されなかったが、弧状に走る溝状遺構を確認した。地中レーダー探査は9号墳周辺一帯の円墳及びその周辺部分で行った。10号墳を除く各古墳の周溝を確認し、新たに滅失墳の周溝と考えられる溝を確認した。9号墳周囲では周溝に沿う状態で、5基ほどの地下式横穴墓と考えられる反応が見られた。

4. 跡江丘陵の基本層序

生目古墳群を形成する跡江丘陵は地元では「シラス」と呼ばれる24,000～25,000年前鹿児島県の始良カルデラより噴出したテフラ「始良入戸火砕流堆積物」（以下、シラス）が堆積し、それを基盤層とする独立丘陵である。その後、6,300～6,500年前のアカホヤ火山灰（以下、K-Ah）、10～13世紀の霧島大谷第5テフラ「霧島高原スコリア」（以下、Th-S）と大淀川下流域で発掘調査をする上で鍵層となるテフラがこの跡江丘陵上でも確認される。以下に示した基本層序は古墳群内における全般的な層序であり、丘陵上すべてを網羅するものではなく、特に、VI層までは近年の耕作により削平されている部分が多い。

I層：表土。

II層：黒褐色土（0～50cm）

旧耕作土を主体とする層。場所によっては、桜島第3テフラ（1471年 通称「文明ボラ」）、霧島新燃享保軽石（1717年）を認めることができる。本土壤を埋土とする攪乱土によって墳丘墳端部、周溝外縁の立ち上がりを削平されている場所が多い。

III層：黒色土（0～30cm）

黒ボク土にTh-Sを含んだ層。Th-S自身が密集して層をなす場合もある。Th-Sは古墳群内の安定した平地では削平を受けていない限り、必ず堆積しており、墳丘平坦面、周溝内でも比較的容易に認められる。当古墳群で発掘調査をする上で、一番重要な層であり、本層以下から慎重な掘下げ作業を行わなければならない。また、中世期における遺構の埋土内にも本土壤が混入しており、その時期を判定する上で、重要なものとなるが、遺構そのものは古墳を崩壊させていることが多い。

IV層：黒色土（0～30cm）

墳丘構築後の黒ボク土である。次のV層とは基本的に違いが見られない。周溝内では、墳丘から流れ込んだ遺物を包含する。また、周溝内では底面と本層との間に、墳丘や周溝外側から流れ込んだ褐色土層（IVb層）を認めることができる。

V層：黒色土（0～50cm）

古墳構築面となる黒ボク土である。先述したとおり、IV層と基本的に違いがなく、互いが直接重なった際は非常に難しい調査となる。基本的に墳丘では本層以下を地山整形、これより上が盛土整形となる。また、弥生時代中期後半から終末期における集落の文化層も含まれており、この層以下で相当期の遺構遺物が確認されることが多い。

VI層：アカホヤ土（0～30cm）

K-Ahの堆積層。橙色、黄褐色であり、丘陵全体に広がる。本層と次のVII層付近が墳丘基底部となることがほとんどである。無遺物層である。

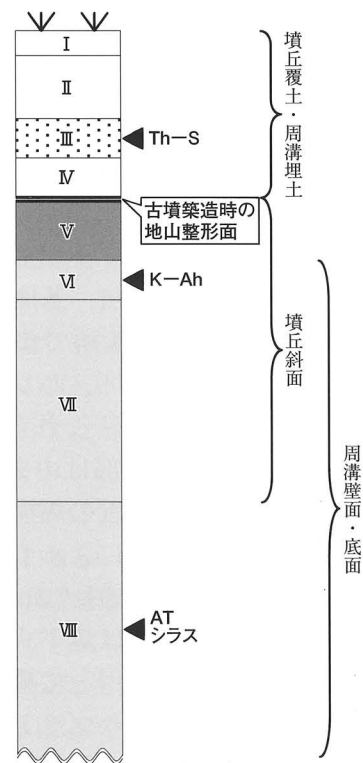
VII層：暗褐色土（80cm前後）

墳丘基底部付近から、周溝底面に認められる。硬くしまるが粘性が無く、壊れやすい。古墳群内の地下式横穴墓は本層内で玄室天井を納める。縄文時代早期の跡江貝塚の文化層でもあり、その時期に相当する土器、焼石が確認されることが多い。

また、この層の下位で霧島小林軽石（14,000～16,000年前）が認められることがある。

VIII層：シラス（500cm以上）

跡江丘陵の基盤層であり、場所、高さの違いで、橙色、白色、桃色のものがみられる。周溝を深く設ける3号墳、7号墳、22号墳では底面がシラス層に達するものがあり、本報告書で述べる地下式横穴墓の竪坑上の封土の主体もこのシラスであり、玄室がその層まで達していることが窺える。なお、このシラスと同様の始良カルデラより噴出したテフラである始良丹沢火山灰（AT）も場所によっては確認されているが、今回は同層として扱う。



第3図 跡江丘陵基本層序模式図

第Ⅱ章 7号墳の調査

1. 調査以前の環境とこれまでの調査の状況

3号墳前方部南側、台地縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳は西から東へ下る傾斜地に立地し、主軸を東西方向に持つ。古墳の後円部、北側、東側周溝を掘割状に造られている道によって大きく削られている。墳丘両側面には、幅3～15m程度の周溝が巡り、現況では前方部前面側は不明となっている。また、後円部南側周溝内には島状の隆起が見られる。調査前は周辺に雑木が繁茂していたが、調査に伴い、墳丘上、周溝内の樹木はすべて伐採した。発掘調査は平成11年度より開始している。

調査箇所

前方部前面墳丘から周溝の外縁にかけて（7A）

後円部北側墳丘から周溝の外縁にかけて（7B）

くびれ部北側墳丘から周溝の外縁にかけて（7C）

7B、7C間周溝（7I）

前方部北側側面の一部と前方部北側側面の周溝（7IIa）

前方部北側隅角周辺周溝（7IIb）

後円部南側くびれ部付近の墳丘から周溝の外縁にかけて（7IIIa）

調査の結果

前方部、後円部共に2段築成である。葺石は上段のみに葺かれる。下段斜面は墳丘北側において削平を受けており、墳端も明確でない。下段テラスは後円部北側で標高25.0m付近、くびれ部北側で25.2m付近、前方部北側側面で標高25.9m付近でそれぞれ幅1.0m前後で巡る。前方部前面では明確に検出されていないものの葺石の基底部の検出位置から推測して標高25.9m付近で巡ると考えられる。

周溝は墳丘周囲を馬蹄形に巡り、共通して周溝外縁が著しく立ち上がる。各位置でのサイズは北側くびれ部付近で周溝幅11m、深さ100cm、隅角周辺は周溝幅側面側で4.0m、前面側で7.0m、深さ約70cm、50cm、前方部前面主軸ライン延長上で周溝幅6.8m、深さ52cmを測る。周溝外縁の立ち上がりはくびれ部付近で隅角付近の前方部側面側で、前方部前面主軸ライン延長上で7.5mを測る。

また、北側周溝のくびれ部から後円部にかけては造り出しが確認された。地山整形で墳丘端周囲のテラスから派生して平坦面をもつものと考えられ、周溝に大きく突き出して構築されている。長さ12.0m、幅3.3m、基底部高54cmを測るが、平坦面部分は削平されている。造り出し周囲の周溝内からは、2箇所集中して多数の遺物が出土しており、小型の甕、壺、鉢、高坏、須恵器の坏身、坏蓋、高坏、ハソウ、把手付鉢、大甕、脚台付壺、柱状器台、垂玉、白玉、石製紡錘車が出土している。これらの遺物は須恵器からTK23段階併行期と推測される。周溝は深さ52cm、幅6.8mで最深部は中央部付近にあり、周溝外縁は現状で95cm立上る。周堤は設けられない。南側くびれ部付近の周溝内からは周溝外縁から墳丘を繋ぐ土橋が確認された。南北方向に設けられ、地山整形によって造られる。路面部分となる平坦面は削平を受けており、原形を留めていない。現状で延長7.0m、路面幅1.0mを測る。

隅角周辺の周溝内からは地下式横穴墓（17号）が確認されている。地下式横穴墓は周溝外縁の立ち上がりの斜面を利用して構築されており、玄室の東半分を削平されている。現状では遺構検出に留まるが、平入りプランを採用していると考えられる。明確な豎坑は見られず、玄室に向かって下る僅かなスロープを持つ。そのスロープの検出位置より7号墳との時期差はさほど感じられない。また、この地下式横穴墓の傍からは供献土器と考えられる土師器の鉢が4個出土している。

2. 平成15・16年度の調査結果

15年度調査位置

北側前方部前面墳丘及び周溝（7Ⅱc）
前方部側面墳丘及び周溝（7Ⅱd）
後円部南側1/4墳丘及び周溝（7Ⅲb）
墳丘主軸上の前方部南側側面墳丘から周溝外縁にかけての調査区（7d）
墳丘主軸の前方部頂から7Ⅲbに接する調査区（7e）

16年度調査位置

前方部側面南側東半分（7Ⅳa）
前方部側面南側西半分（7Ⅳb）
前方部前面南側西半分（7Ⅳc）
後円部南側周溝の外側（7Ⅴ）

墳丘（7Ⅱc、7Ⅱd、7Ⅲb、7d）

墳丘は前方部後円部共に2段築成で造られ、葺石は上段斜面のみに葺かれていたと考えられるが、上段基底部から平面で1.5~2.0mの位置までしか遺存していない。また、前方部と後円部の接続部分延長上の後円部斜面には、本来より施されていなかったと考えられる。

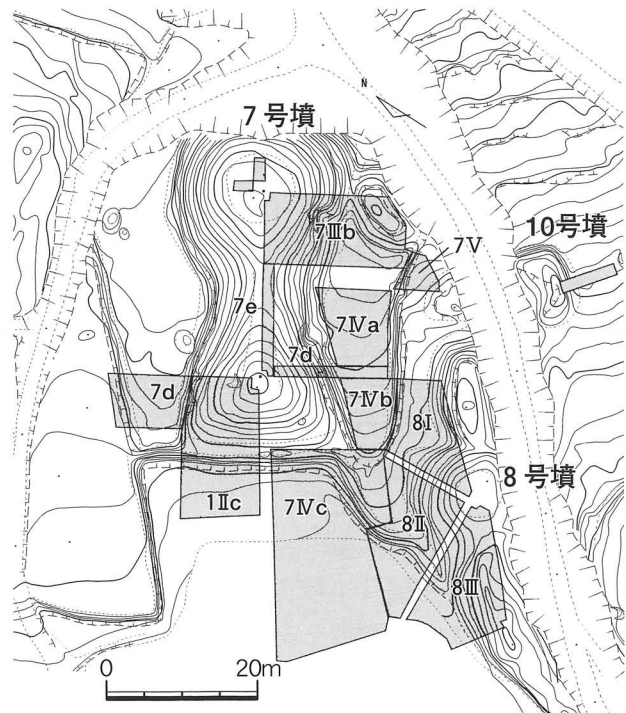
葺石は所々で縦方向に区画列は見られるものの、目地が見えないほど礫を充填する3号墳、5号墳、14号墳と比較して仕事に粗雑さが見られる。区画列石は直径5~25cmの砂岩の円礫、区画内の葺石も10~25cmとさほど大差が見られず、基底部の根石列に関してもそうであるが、くびれ部では、20~40cmの根石がみられる（7Ⅲb）。葺石の根固めのための粘土等は認められない。

墳丘盛土はシラス土、ローム土を主体としており、粘性を持たない。そのため、葺石が遺存していない墳丘斜面、本来敷石を施さない平坦面では、盛土の流出が著しい。

明確に下段テラスを確認できたのは前方部両側面（7Ⅱc、7d）と後円部南側（7Ⅲb）で、前方部側面北側の隅角付近で標高26.0m、中央部で25.1m前方部側面南側で26.1m、後円部南側くびれ部で25.0m付近でテラスが巡り、前方部から後円部に向けてテラス自身も大きく下る状況が見られる。テラス幅は1.0m前後で巡ることを基本とするが、くびれ部付近では1.8mと要所では幅広になる。前方部前面（7Ⅱc）、後円部側面南側（7Ⅲb）付近ではテラスの検出はできなかったものの、上段葺石の基底部の状況から前方部前面では標高26.7m、後円部側面南側では標高24.8m付近でテラスが巡っていたものと考えられる。

下段斜面は前方部北側（7Ⅱd）ではテラス以下が殆ど削平され、原形を留めない（7Ⅱd）。前方部前面（7Ⅱc）、前方部側面南側（7d）、後円部南側（7Ⅲb）では原形に近い状態で遺存していると考えられ、前方部前面では墳端から0.7m、後円部南側では墳端から1.1mが地山整形と盛土整形の境になる。

後円部平坦面では墓壙の掘方を確認するための調査を行った。主軸に直行する西側1/4（7Ⅲb）を面的に、主軸上、主軸に直行する位置の2箇所幅1.5mの調査区を設定した。墓壙と判断される掘方の範囲確認を行った。結果、それぞれの調査区で掘方と判断できる状況がみられ、現状で東西7.2m、南北6.0mの平坦面全体に広がる規模の墓壙が推測される。今後の調査では、墓壙のプラン確認が必要である。



第4図 7号墳周辺15・16年度調査区位置図(1/1,000)

周溝

周溝は前方部前面側で幅6.2～7.0m、深さ70～80cm、前方部側面北側で6.0m、深さ70cm、側面南側で幅4.7mと南側が狭くなる。この傾向はくびれ部に近い位置でも北側が幅11.0mであるのに対し、南側では9.0mと全体的に見ても南側周溝の幅が狭くなる。

周溝の外縁は検出箇所すべてにおいて削平を受けているが、本来は著しい立ち上がりを呈しており、復元すると、前方部前面で120cm、前方部側面北側で170cm、前方部側面南側で180cm、南側くびれ部の延長上では140cmを測る。

また、前方部前面主軸ラインよりやや南側では周溝外縁から墳丘を繋ぐ土橋が確認された。長さ6.5m、路面幅1.1m、基底部からの高さは40cmを測る。地山整形により造られる。また、前方部南側隅角あたりにおいても、土橋の存在を想起させる状況が確認できる。前方部前面側の周溝底面が隅角に行くに従い立ち上がりが見られ、前方部側面側の周溝底面も隅角に向けて立ち上がる。ただし、その土橋状の施設は中世期に走っていた道路状遺構によって切られており、その形態を確認することはできない。この土橋状の施設は7号墳の南西部に近接する8号墳（第三章報告）周溝を避けるために7号墳周溝を意図的に設けなかった残存部の可能性も考えられる。

周溝内ではこの他、地下式横穴墓が8基確認されている。

出土遺物（第8図）土橋南側の墳端部付近からは須恵器の高坏が出土している。高坏は無蓋高坏で体部に2条の突帯を有し、下部に把手の痕跡が残る。（1）

地下式横穴墓

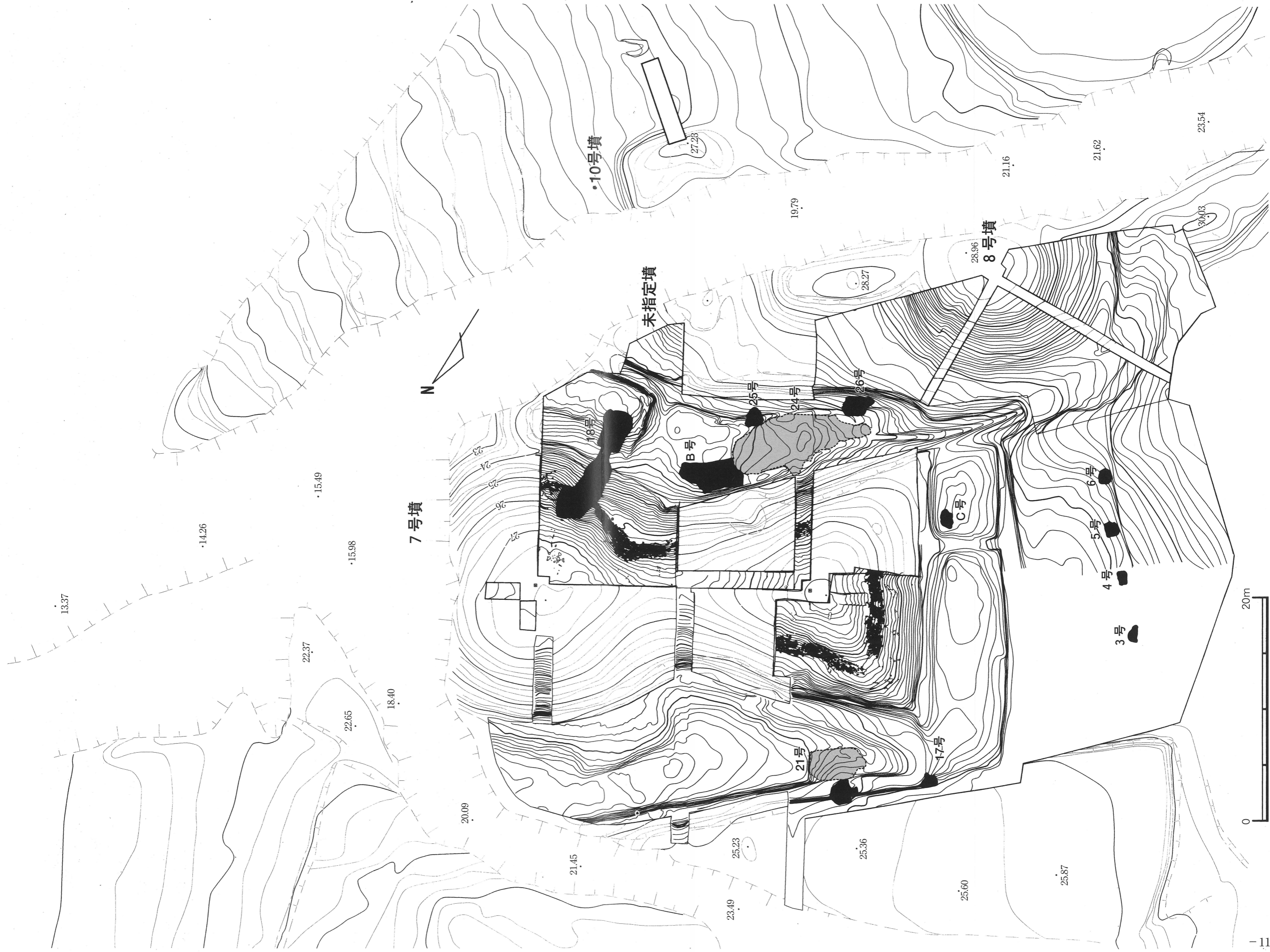
18号地下式横穴墓（第6・7図）

平成15年度の11月に行った地中レーダー探査の仮報告の中で、後円部南側の墳丘斜面に認められる大規模な陥没坑の延長上の周溝内から、墳丘に向かって設けられる地下遺構の存在が指摘されたため、同年度に行った当該地の確認調査でもその地下遺構の存在を想定しながら調査を行った。結果、予想外となったが、後円部南側周溝斜面から後円部の中心部に向かって構築される地下式横穴墓が検出された。地下式横穴墓は玄室天井と羨道竪坑がすでに崩落しており、調査前から認められた墳丘の陥没坑は玄室天井が落ち窪んだためにできたものであることが解った。

玄室の陥没坑は長さ6.7m、幅3.4mを測る大規模なもので、その形状から奥に向かって長方形の玄室を持つ、妻入りプランになると考えられる。

竪坑は周溝内に設け、墳丘基底部付近の地下に羨道を、墳丘の地下に玄室を設けていると考えられる。竪坑を設ける周溝は西側に控える土橋状の施設を挟んで形状の違いが見られる。土橋状の施設より西（前方部側）の周溝の最深面までは20cmを測るのに対し、土橋より東の周溝の最深面（18号地下式横穴墓周囲）までは130cmを測り、土橋を挟んだ周溝の底面は110cmの較差がある。確認される竪坑は奥行3.64m、羨門付近の幅2.15m、羨門付近の深さ1.85mを測り、半楕円形の平面プランを呈する。羨門を設ける壁に対して竪坑両壁はほぼ直角に造られ、羨門正面の壁は楕円形になり、緩やかに下りながら、羨門に至る。羨門は幅1.15m、高さ1.56mを測り、両側の壁は途中から内斜しており、屋根を意識した構造を呈する。羨門の左袖には高さ35cmの丁寧に整形されたシラスの塊が見られる。竪坑底面はシラス土を主体とする土を厚さ25cmで貼床の様に施し底面とするが、面を成さずに著しい起伏がある。

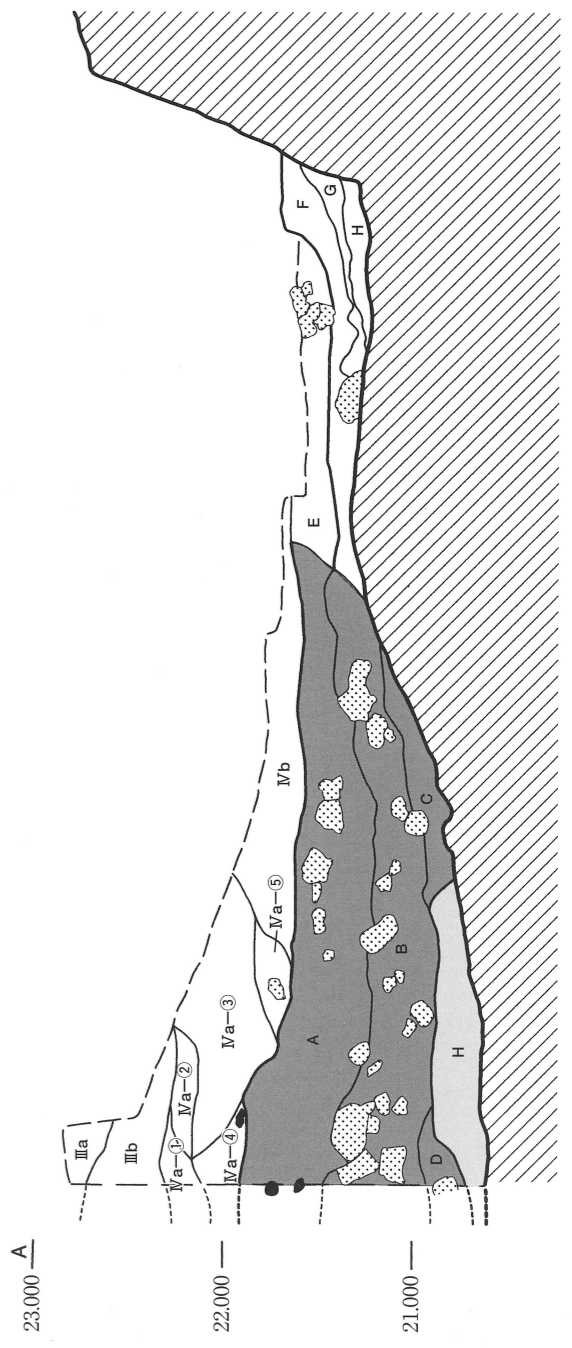
竪坑周囲には、やはりシラスを主体とする置土が認められる。置土は竪坑を取り囲むようにして施されており、厚さ15～40cmで東西方向約7.0m、南北方向約3.5mの範囲に見られ、周溝底面の整形のために施されたと考えられる。また、竪坑南東部では長軸2.35m、短軸1.2mの楕円形の土坑が確認でき、深さは40cmを測る。現段階では、この土坑が地下式横穴墓の初葬時の竪坑の一部で、追葬時の竪坑が現在確認されている竪坑ではないかと考えられるが、妻入りプランの玄室を持つ地下式横穴墓には追葬の類例がない。今後、この土坑について確認調査を行



第5图 7号墳周辺全体图 (1/300)



第6図 18号地下式横穴墓周辺図 (1/60)



- 土層断面図解説(※跡江丘陵基本層序をベースとする)
- IIIa 黒色土
 - IIIb 黒色土
 - IVa-① 黒褐色土
 - IVa-② 暗褐色土
 - IVa-③ 黒褐色土
 - IVa-④ 黒色土
 - IVa-⑤ 黒褐色土
 - IVa-⑥ におい黄褐色土
 - A におい黄褐色土
 - B 明黄褐色土
 - C 明黄褐色土
 - D 黒色土
 - E におい黄褐色土
 - F 黒色土
 - G 明黄褐色土
 - H 明黄褐色土
- 2~8mmの棕色の粒(高原スコリア)を密に含む
 1mm程度の棕色の粒(高原スコリア)をわずかに含む
 1~10mmのアカホヤ粒を少量含む
 15mm程度のアカホヤとの褐色ロームの粒を1つ含む
 1~5mmのアカホヤ、ロームの粒を少量含む
 2~5mmのアカホヤ粒を多く含む
 2~10mmのアカホヤ粒、直径10cmの褐色ロームを含む
 2~3cmの褐色ロームブロック、シラスブロックを多く含む
 3~10mmの褐色ローム、2~5cmのローム、シラスのブロックを多く含む
 シラスのブロックを多く含む
 2cm程度のシラスと褐色土のブロックを含む
 シラスと黒褐色土が混む
 明黄褐色土。シラスが混む
 暗褐色土。1~3cm程度の褐色ロームブロックを含む
 3~10mmの褐色ローム粒、10~20cmのロームとシラスの塊を多く含む
 におい黄褐色土
 黒色土。1~2cmの褐色のロームブロックを少量含む
 黒色土。3~5cmの褐色ロームブロックを少量含む
 明黄褐色土
 粗粒なシラスの張り土(置土)

第7図 18号地下式横穴墓竖坑土層断面図 (1/40)

う必要がある。

さらに、周溝内の調査区の東端では、地下式横穴墓の封土の可能性のあるものを確認した。調査段階では周溝外部からの流れ込みの土壌と判断していたが、後述する21号、24号地下式横穴墓の竪坑上で封土が検出され、再検討を行った結果、地下式横穴墓の封土としても判断できると考えられる。ただし、地下式横穴墓の封土であれば、結果的に切ってしまったことになるが、現状では地下式横穴墓の竪坑は検出されておらず、可能性として留めておきたい。(便宜上、本報告内ではA号地下式横穴墓とする)復元すると高さ75cmを測り、現存で幅3.25mを測り、封土は18号地下式横穴墓周囲の置土直上にあり、18号地下式横穴墓構築後に置かれたものと判断できる。

出土遺物(第8図) 地下式横穴墓竪坑を設ける周溝内の黒色土(Ⅳ層)内から土師器片、須恵器の坏蓋、短頸壺、甕の口縁部が出土している。これらの遺物は周溝外縁側から流れ込んだような状態で出土している。また、A号封土より10~20cm程浮いた位置で、須恵器の甕(6)が出土している。甕(6)以外の遺物は、周溝外縁付近で18号地下式横穴墓の墓前祭祀を行った際の器材やA号に伴う可能性など、慎重に取り扱わなければならない。周溝外縁外側の調査の状況は7Vの項で報告する。2は土師器の坏で丸底を呈し、後円部は直立する。3~6は須恵器で3の坏蓋は体部と後円部間の稜はシャープさがなく、端部内面は稜を持つが明確ではない。4の短頸壺はハソウ様の体部を持ち、上位に最大径がある。体部下半はタタキの後、ナデ消す。後円部は直立し、端部は窪む。5、6は甕で6は胴部中位に格子目タタキをその上下に平行タタキを行い、その後、カキメを施す。5は口頸部で逆コ字状を呈する。口縁端部に向かって肥厚し、端部下には突線を、頸部には波状文を巡らす。

21号地下式横穴墓(第5図)

北側前方部側面側周溝の外縁斜面を利用して構築され、周溝外縁に向かって玄室を設ける。調査は検出状態で留めており、玄室は天井が崩落した後、削平されており、遺存状態から平入プランを呈すると判断される。竪坑推定位置上には、封土が覆う。封土は長軸5.0m、短軸2.8m、高さ70cmを測り、豊かに膨らんで見える。基底部付近には直径20cm程の砂岩の円礫が数十点確認できるが、周溝内に転落したものか、地下式横穴墓に伴うものかは現段階では判断できない。封土と周溝底面間には約10cmの自然堆積土(基本層序Ⅳb層)が見られるため、7号墳構築の後、遅れて構築されたことが窺える。封土上やその周囲では土師器片が出土しており、墓前祭祀を行ったものであると推測される。

出土遺物(第9図) 7の土師器の壺は球体の胴部を持ち、丸底を呈する。肩から口縁部にかけて緩やかに開き、口縁部は直線的に外に開く。

24号地下式横穴墓(第5図)

前方部南側側面の周溝内で確認され、周溝側に竪坑、墳丘側に玄室を設けていると考えられ、玄室は前方部頂部に向かって構築していると推測される。竪坑の形態は不明で、竪坑上には大規模な封土が確認でき、幅11.5m、長さ5.3m程のシラス土を主体とする。封土は縁辺部では高さ20cm程である。この封土と周溝底面間には自然堆積層(基本層序Ⅳb層)がみられるため、7号墳構築後に、構築されたことが窺える。封土上には高坏、坏、壺等の土師器片(8~21)が大量に出土しており、墓前祭祀を行ったものであると推測される。

出土遺物(第9図) 8~18は碗・坏類で8はその他に比べ深く、体部から口縁部に向かいそのまま内湾するのに対し、その他のものは浅く、口縁部付近で内側に傾く。底部形態は丸底か若しくは丸底気味の平底である。19の壺は丸みを帯びる胴部を呈すると考えられるが、接合には至らなかった、底部は丸底を呈し、口縁部は直立し、端部を丸く収める。20は丸底を呈し、丸みを帯びる胴部を持つ。口縁部が外方向に直線的に開く。21は坏部に明確な稜のある大型の高坏で、7号墳造り出し周囲から出土した大型の高坏群(宮崎市教委2003)に非常に似るが、同時期の宮崎県内の他の遺跡からは今のところ類例がない。

B号地下式横穴墓（第5図）

後円部南側の墳丘くびれ部付近で確認された。幅2.7m、長さ5.2mを測る方形に近いプランを呈する。地下式横穴墓ではない可能性もある。周溝底面でプランが検出された。地下式横穴墓であるならば墳丘方向に玄室を設けると考えられる。掘方上では、土師器の甕片（22）が纏まって出土しているが30cm浮いた状態で出土しており、当地下式横穴墓には伴わない遺物の可能性もある。今後地下式横穴墓であるかどうかの確認調査をする必要がある。

出土遺物（第9図） 22の土師器の甕は長胴の甕で、円盤状の底部を貼り、底面には木葉痕が残る。胴部から口縁部へは緩やかに開く程度で屈曲しない。

25号地下式横穴墓（第5図）

前方部側面中央部付近の周溝外縁で確認された。周溝外縁の立ち上がり斜面を利用するタイプの地下式横穴墓である。玄室の陥没坑のみの検出で、竪坑付近は24号地下式の封土が覆っており、24号以前の構築の判断はできるものの、その形態、規模については不明である。

26号地下式横穴墓（第5図）

前方部側面隅角寄りの周溝外縁で確認された。玄室の陥没坑のみの検出である。陥没坑は長軸で2.2m陥没坑竪坑付近は、24号地下式の封土が覆っており、24号地下式横穴墓以前の構築の判断はできるものの、その形態、規模については不明である。

C号地下式横穴墓（第5図）

前方部前面土橋の墳丘との接続部分の南側で確認され、掘方のみの確認である。長さ2.2m、幅1.2mを測る楕円形の掘方で、地下式横穴墓ではない可能性もある。地下式横穴墓であれば、墳丘方向に玄室を設けると考えられ、今後地下式横穴墓であるかの確認調査をする必要がある。

この他、前方部前面側の周溝外縁より外側の平地には耕作土が最大で2.0m堆積する状況があった。今回の調査で、旧地形の復元と平成6年にその一帯で確認された4基の地下式横穴墓の確認を目的として盛土を除去した。結果、旧地形が7号墳墳丘に向かって下っていく傾向が見られ、緩やかな谷部内に7号墳が立地していることが明らかになった。また、平成6年に確認された4基の地下式横穴墓（3～6号）もその位置を確認した。それぞれの4基は5.0mの間隔を持って直線状に並び、前方部前面や周溝外縁のラインに平行しており、明らかに7号墳への意識が窺える。いずれの地下式横穴墓も7号墳側に竪坑、外側に玄室を設ける。

7V（第5図）

18号地下式横穴墓が確認された付近の周溝の外側に設定した調査区である。調査の結果、地山削り出しの墳丘状の高まりが確認された。調査区内での最高位置では一部墓壙も確認されており、墳丘である可能性が高い。墳丘は約半分が東側の旧市道によって削平される。調査区での情報で復元すると直径7.8m、高さ1.1m、墳丘斜面角度15°を測る小規模なものになる。

この新たな墳丘と7号墳の周溝外縁間の平場では土師器の椀、須恵器の大型ハソウが纏まって出土している他、墳丘の斜面部からも須恵器の甕の胴部片が出土しており、墳丘平坦面に配置されていたものが、墳端付近の平場に転落したものと考えられる。

出土遺物（第9図） 23は土師器の高坏の脚柱部で全容は不明である。24、25は土師器の椀で共に丸底気味の平底を呈し、24は口縁部に内湾しながらのびる。25は24より、大型のものになる。26は須恵器の大型ハソウで、体部中位に最大径を持つ。体部中位以下にはケズリを施した後、ナデ消す。頸部には波状文を施し、端部に向かって屈曲せずに開く。穿孔は胴部中位より、やや上に施す。27は甕の口頸部で大きく外反し開く。端部は肥厚し、僅かに窪む。端部に突線を頸部上位に波状文を巡らす。

7号墳とそれに伴う地下式横穴墓について

7号墳の周辺では可能性のあるものも含め、13基の地下式横穴墓を確認した。18号地下式横穴墓周辺を除いて、遺物を伴う地下式横穴墓は17号（2004報告）、21号、24号である。特徴として、須恵器を伴わず、それぞれの地下式横穴墓で土師器の鉢、坏類の占める割合が高く

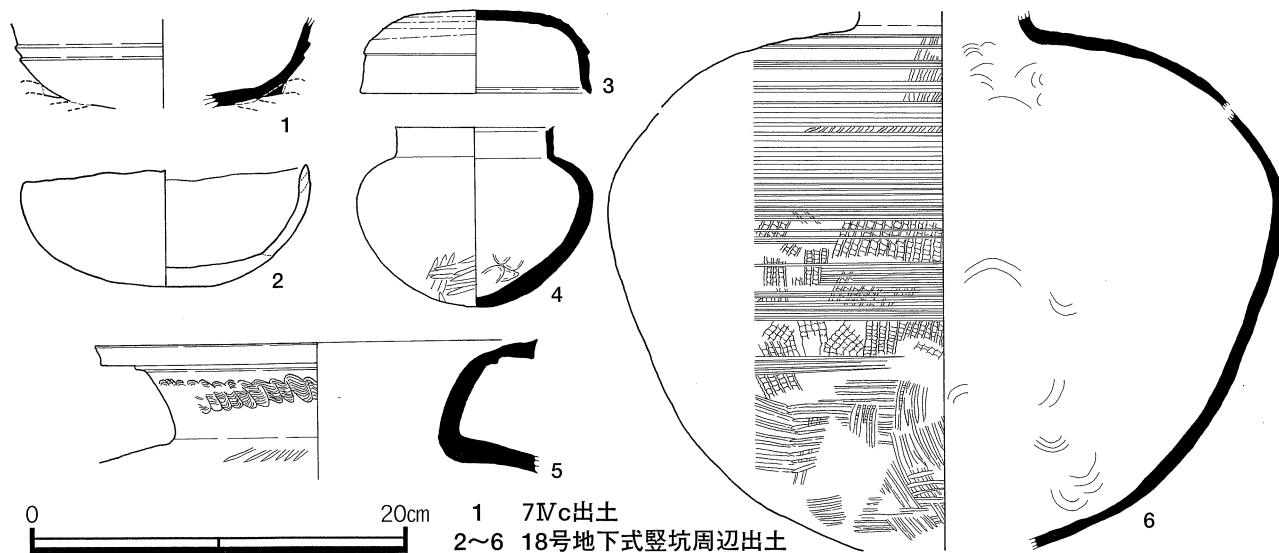
(2004報告の19、20も出土位置より、21号地下式横穴墓に伴うものと考えられる。)、須恵器坏類の代用として、意図的にそれを選んだように感じる。これらの遺物は出土量の割には編年案に合致する遺物に乏しいが、概ね21号、24号は松永・今塩屋編年5期(TK47、MT15段階併行期)に相当する。24号の封土に覆われるB・25・26号はそれに先行する。特に24号地下式横穴墓は前方部の最頂部に向かって玄室を構築していると考えられ、封土の規模から判断しても、大型の玄室を持つものと考えられる。

7号墳と18号地下式横穴墓の構築時期であるが、後円部平坦面に墓壙が存在しており、単純に判断すれば、7号墳構築後に後円部中心に向かって18号地下式横穴墓を構築したと解釈できる。しかし、これまでの調査で得られている情報では、後円部上の墓壙と18号墳の先後関係を明確にすることはできない。少なくとも、18号地下式横穴墓は偶然その位置で検出されたのではなく、明らかに後円部の中心を目指して構築されており、7号墳構築以前のものであることは考えられない。

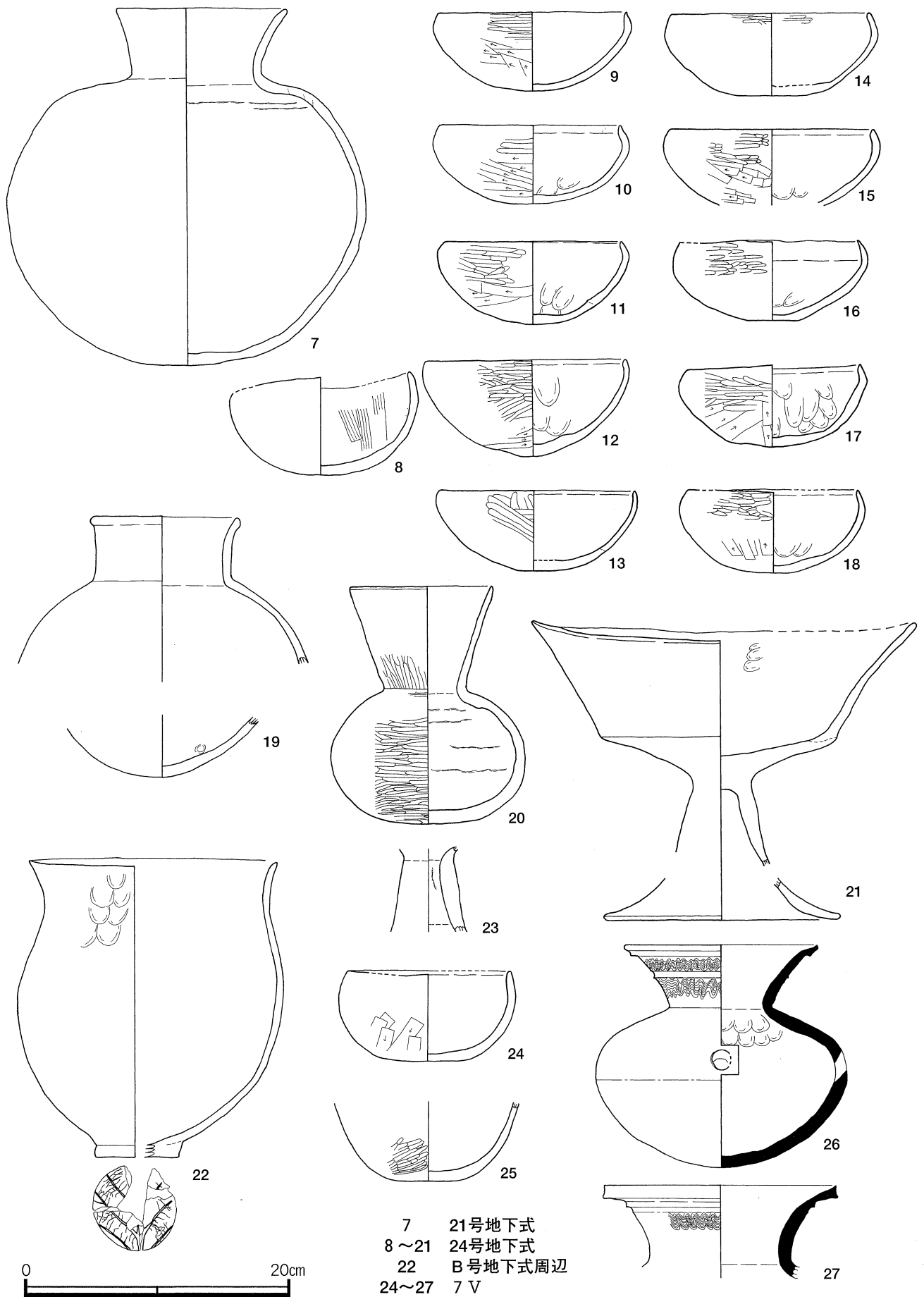
18号地下式横穴墓は後円部に見られる長さ6.7mを測る縦長の大規模な陥没坑より、妻入りプランを呈する大型の玄室を持つ地下式横穴墓であることが推測され、奥行きが5.0m強の玄室規模になるのはほぼ間違いない。こういった大型の玄室を持つ地下式横穴墓は、西都原地下式4号(5.5m)、下北方地下式5号(5.4m)、本庄地下式15号(5.5m?)など、宮崎平野部に分布し、古墳の被葬者に遜色のない副葬品を持つ。これらが類する縦長妻入りの玄室の地下式横穴墓は5世紀後半代の築造であり、18号地下式横穴墓もその時期に納まるものと考えられる。

18号竪坑周囲の周溝は、その西側(前方部側)の周溝と比較して1.1m深く設けられている。その部分に盛られた竪坑周囲の置土は底面に密着しており、施設構築直後に18号地下式横穴墓を設けたことが伺える。この施設を東方向から見る位置に立つと一番奥に竪坑が位置しており、地下式横穴墓周囲のこの施設は周溝というよりも地下式横穴墓を構築するための墓道として捉えてよいだろう。そのため、この一帯が18号地下式横穴墓構築のために改変を行っている以上、底面に密着して置土が見られたとしても、21号や24号地下式横穴墓の封土で7号墳と比較できたように、18号地下式横穴墓と7号墳との構築時期差を単純に比較することはできない。

これまでの生目古墳群の調査でも5号墳において19号地下式横穴墓が確認され、前方後円墳に地下式横穴墓が寄生することは明らかになっていた。今回の7号墳の調査では、単純に数の上で圧倒的に凌いただけでなく、前方後円墳の主体部にもなりうる可能性のある地下式横穴墓の存在、竪坑上に封土を持つ地下式横穴墓の存在、また、24号地下式横穴墓のように7号墳構築後ある程度の時間を経たのちもシンボルとして採用している点など、今後の地下式横穴墓研究を行う上で重要な存在になるであろう。



第8図 7号墳周辺出土遺物①(1/4)



第9图 7号墳周边出土遺物② (1/4)

第Ⅲ章 8号墳の調査

1. 調査以前の環境とこれまでの調査の状況

7号墳の南側に位置する古墳である。本古墳は円墳として指定されているが、現況は、縦長の歪な形をしており、4箇所で島状の隆起がみられる。8号墳側辺には旧市道「城の下線」が通っており、調査以前から道路建設の際の廃土が指定を受けた可能性も考えられた。墳丘上には現在カラカシ、サカキ、マテバシイなどが見られる。発掘調査は平成13年度に行われた。

【調査箇所】

墳丘には4箇所で島状の隆起が見られ、それぞれに4本のトレンチを設定し、北から8A、8B、8C、8Dと名付けた。

【調査の結果】

本古墳の調査では墳丘であるか否かに関わらず、人為的な盛土が検出されることが予想されたため、古墳に伴う盛土であるかは、10～13世紀に降灰した霧島高原スコリアとの先後関係を判断材料とすることとした。

調査の結果、8A、8Cでは霧島高原スコリア上位でシラス土を主とする土壤によって構成される盛土が、12～13世紀に降灰した高原スコリア火山灰（以後、Th-S）を含む黒色土層の上位で確認された。盛土は8Aで245cm、8Cで210cm堆積している。8A、8C周辺の島状の隆起は古墳でないことが判明した。

8B、8Dでは調査の結果、霧島高原スコリア下位で盛土が確認された。そのため、墳丘の可能性が想定される。8Bを設定した調査区が位置的に本来の8号墳である可能性が高く、調査の結果、高さ2.8mの円墳と推定される。墳丘は墳端から0.8m間が地山削り出しで、それ以上が盛土によって構成されている。遺物は墳頂部付近から須恵器甕の胴部が出土している。

8D周辺は墳丘が要壁状に立っている。調査の結果、Th-S下位で盛土が確認された。盛土はアカホヤ火山灰土上位の黒色土の上に75cm堆積しており、その位置より滅失古墳の旧15号墳であると考えられる。

2. 平成16年度の調査結果

16年度は13年度の調査結果を踏まえ、8号墳の本来の形態確認を行った。まず、墳丘上から周辺に置かれた古墳とは関係のないシラスの盛土を除去し、発掘調査にあたった。

調査区は東側より8I、8II、8IIIと設定した。調査の結果、墳丘は無段築であり、墳丘斜面には葺石を葺かないことが確認された。墳丘の東側約1/3は掘割状に造られた旧市道により削平される。また、墳丘周囲の南側では、幅約2.8m、深さ約120cmの周溝が残り、やはり周溝の外縁は著しい立ち上がりが見られる。この周溝は途中から、中世期に構築されたと考えられる道路状遺構および、後世の造成等よりに削平され、それ以外の部分では遺存しない。しかし、道路状遺構内の埋土からは8号墳所産であると考えられる土師器の高坏、須恵器の坏身、坏蓋、高坏、ハソウ、鉢形器台の破片（28～51）が大量に出土している。墳頂部では墓壙であると認識できる掘方を確認した。

周溝内には、小規模ではあるが7号墳周溝で確認されたようなシラスを主とする封土が2箇所確認され、これらについても地下式横穴墓である可能性が高い（27号、28号）。地下式横穴墓は検出面で留めており、周溝の外に向かって玄室を設けていると考えられ、シラスの封土は周溝底面との間にある程度自然堆積層を挟んだ後に盛っている状況がみられ、8号墳墳丘構築後、ある程度時間が経過した後に構築されたことが窺える。28号地下式横穴墓の傍らからは、土師器の鉢、壺（52、53）が出土しており、28号地下式横穴墓の封土上から転落したものであろう。

出土遺物（第10図）

28～51は8号墳周溝を切る中世の道路状遺構から出土した遺物である。掲載したもののうち、28のみが土師器で、それ以外は須恵器である。

28は高坏の脚柱部で、坏部の下半で脚柱部から屈曲して坏部が開く。29～33は坏身で、立ち上がりはいずれも、途中で屈曲することなく、まっすぐ内傾する。30～33は口縁端部が僅かに窪みを持つが、29は端部を丸く納め、古い様相を示す。34～38は坏蓋であるが、34は口径がその他に比べ小さいため、坏蓋でない可能性もある。いずれも、天井部と口縁部間の稜がしっかり造られる。口縁部は35、37が僅かに外に開き、その他は直立する。口縁端部はいずれも窪みがある。

39～42は無蓋高坏で41は全容が解らないものの把手の痕跡がみられる。42は高坏の脚部で、大きく外反し、端部には突線を巡らす。脚部にはカキメを施す。

43、44は小型のハソウで体部中位に最大径を持ち、その位置で波状文を巡らす。43は頸部、口縁部にも巡らす。43は丸底を呈し、口縁端部は僅かに窪む。45、46は大型のハソウである。互いに口縁部に波状文を巡らし、頸部の遺存する45には頸部にも見られる。45は頸部から口縁部にかけて、S字状に外反し端部は45、46共に窪む。

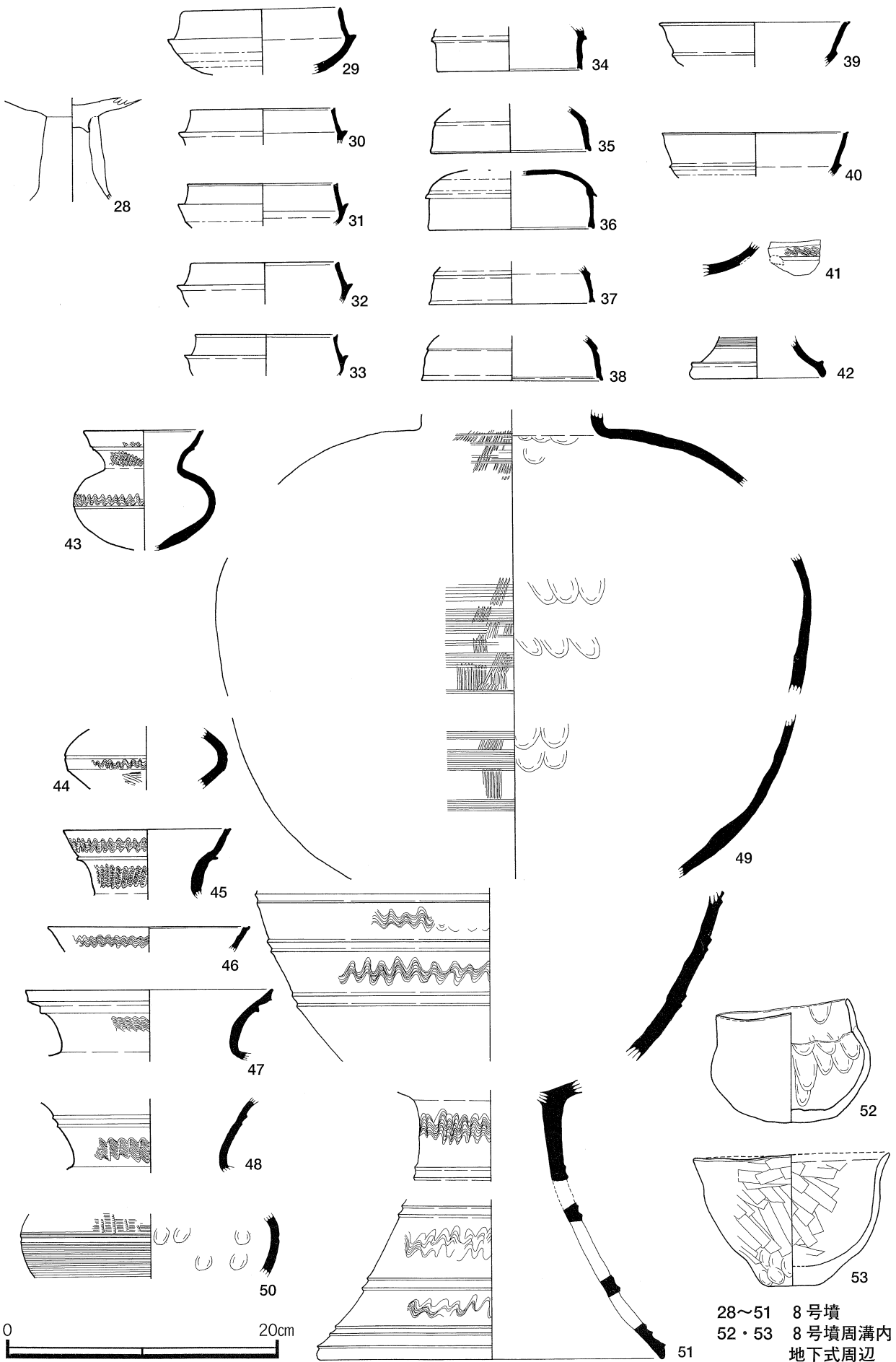
47～49は甕で47、48は頸部以上の資料である。47は1条、48は2条の突線を巡らし、それ以下の頸部に波状文を巡らす。49は胴部で全体に平行タタキの後にカキメを施す。内面はナデ消す。47と49は同一固体の可能性もある。50は球体の胴部を持つ、短頸壺と考えられる。全体にカキメを施したのち、最大径付近に沈線を1条、その上にカキメと同様の工具で刺突がみられる。

51は高坏形器台であるが、互いの破片に接点がなく、図上で復元した。坏部は2条単位の突線を3段に巡らし、それらに囲まれる範囲には波状文を巡らす。また、最下段の突線以下は平行タタキののち、ナデ消される。脚部は2条単位の突線を3段と最下段のみに1条を巡らす。それぞれに囲まれる部分には波状文を施し、上から2段目に形状不明（楕円形？）の透かし、それ以下の2段には逆三角形の透かしを施すが、本来の形、個数は不明である。

52、53は28号地下式横穴墓の封土の脇で出土した遺物である。共に土師器であり、52は壺で、須恵器の短頸壺を模倣したものであろうか。扁球形の胴部を持ち、平底の意識は見られるが、丸底を呈する。頸部は直立するが、胴部間には明確な稜はみられない。53は小型の鉢で、安定した平底を呈する。底部から口縁部に向けて、内湾しながら開くが、端部付近で外反する。

今回、出土したこれらの多くの遺物は殆どが8号墳の周溝を切る道路状遺構の埋土内から出土した遺物であるため、それらを資料として取り扱うには慎重にならなければならないが、8号墳の墳丘斜面でも土師器、須恵器の破片は僅かながら出土しており、51の高坏形器台とも接合している。そのため、8号墳にこれらが伴うのは妥当であり、墳頂部付近に配置された器材が斜面以下に転落し、周溝を横切って造られた道路状遺構の埋土に流れ込んだと判断しており、8号墳出土の一括資料として取り扱いたい。

7号墳においても後円部北側の造り出し周囲の周溝の底面から、多数の土師器、須恵器が纏まって出土しており、現段階では7号墳構築時期を判断する資料と考えられる（宮崎市教委2003）。互いにTK208段階併行期の資料と考えられるが、坏身の口縁部形態、坏蓋の稜の状態、8号墳に大型ハソウが伴うなど若干の古い様相が見られ、及び調査の状況では、8号墳付近で7号墳周溝が避けるような状況で構築されていることから、8号墳が7号墳に先行するか、若しくはほぼ同時期に構築されたものと考えられる。



第10图 8号墳周边出土遺物 (1/4)

第IV章 10号墳の調査

1. 調査以前の環境

7号墳の南側の旧市道「城の下線」を挟んだ位置に立地する古墳である。本古墳は円墳として指定を受けるが、長方形に近い歪な形をしており、現状で長軸11.2m、短軸6.0mを測る。墳丘上にはサカキ、マテバシイなどが見られたが調査のために伐採を行った。

2. 平成16年度の調査結果

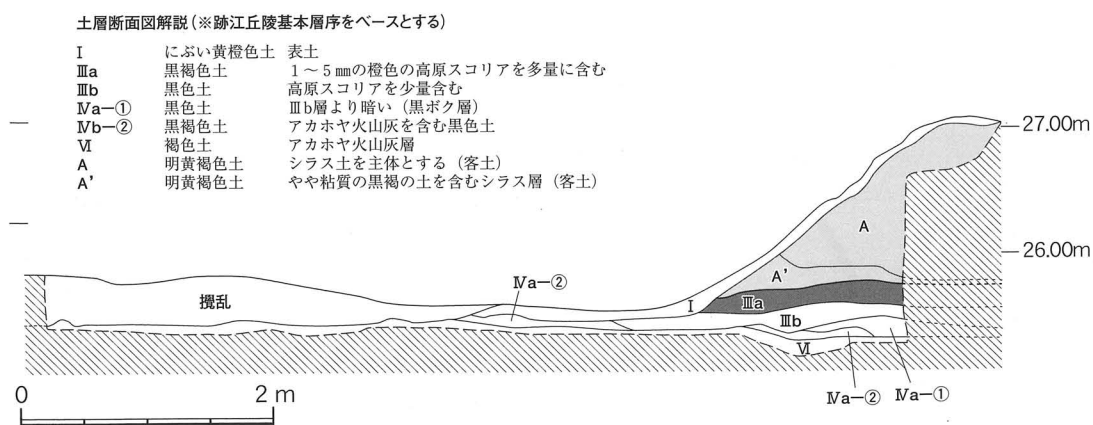
10号墳はその歪な形状から、旧市道の向かいの7号墳周溝内や8号墳を包んでいたシラスを主体とする土により構成された島状の隆起と同じく、調査以前より古墳でないことも想定していた。

調査は墳頂部付近からその外側に向け、巾1.5m、長さ5.0mの調査区を設定した。当初は墳丘であることを想定し、表土の除去作業を行った。現状墳丘部分では7号墳や8号墳で見られたそれと同じく、表土除去中にシラス土が見え始めたため、墳丘でない可能性が高くなった。

現状の墳丘周囲側では土壌の攪乱が著しいものの現状の墳丘裾付近で墳丘を構成するシラス土以下でTh-Sを含む黒色土層（Ⅲ層）の堆積が見られ、10号墳は墳丘でないことが判明した。

【地元の高齢者のはなしより】

10号墳調査中に地元のご老人（男性 80～90歳）が生目古墳群を散歩で訪れた。その際に、10号墳や7号墳、8号墳の島状の隆起について、心当たりはないか質問をしたところ、「戦前（大東亜戦争）以前に地元の方々が山（古墳群の存在する丘陵）を挟んで存在する集落と水田を繋ぐために道路（現在の旧市道「城の下線」）を通した。これらの土はその時に道の両側に積み上げた廃土で、古墳群を指定する際（昭和18年9月8日指定）も古墳でもない土の山まで何で指定するのだろうか。と地元ではちょっとした話題になった。」という回答を得られた。道路を造った当時、ご老人はまだ子供だったということであるため、その工事は大正時代終～昭和10年以前に行ったものだと考えられる。



第11図 10号墳土層断面図 (1/60)

第V章 14号墳の調査

1. 調査以前の環境とこれまでの調査の状況

古墳群中央部に位置し、前方部南東側には15号墳が位置する。東側、北側、西側は谷に囲まれており、西側は沖積地に向かって開けており、丘陵外からも14号墳を望むことができる。

墳丘上には現在カラカシ、マテバシイ、スギなどが見られ、14号墳前方部から15号墳周囲にかけては、以前ココスヤシの苗圃として利用されていた。発掘調査は平成13、14年度に行われた。

【調査箇所】

墳丘主軸ラインの後円部背面墳端から周溝外縁推定位置にかけて (14 a)

後円部北東側から周溝外縁及びその外側にかけて (14 b)

墳丘主軸ラインに後円部中心で直行する東側墳端から周溝外縁推定位置にかけて (14 c)

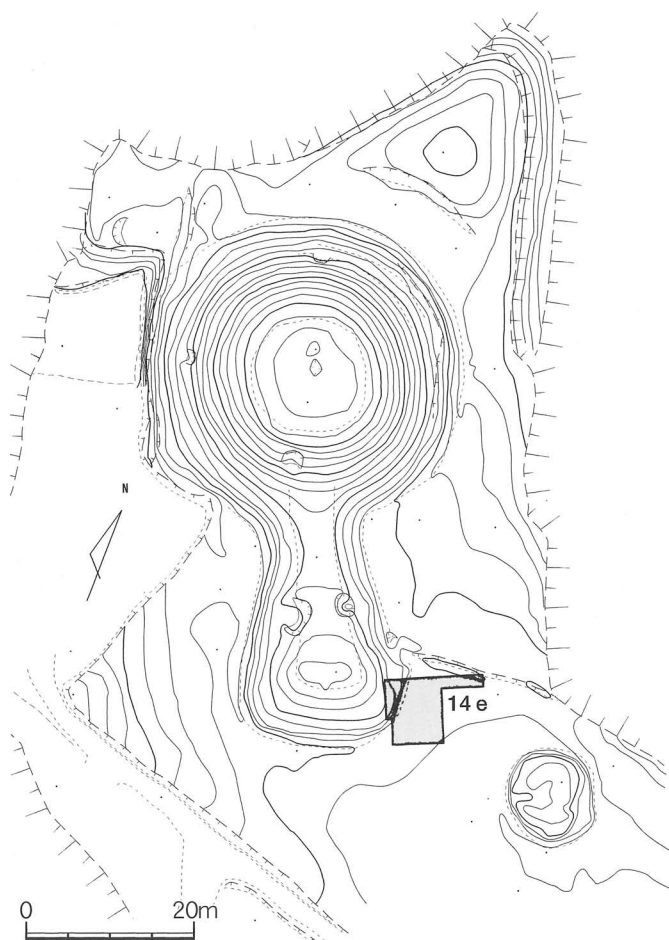
くびれ部東側付近の前方部及び一部周溝外縁推定位置にかけて (14 d)

墳丘主軸ラインの前方部前面から墳端外側の延長上 (14 f)

【調査の結果】

墳丘の状況が解ったのは14 d、14 f を設定した前方部である。前方部は二段築成で後円部に接続する。前方部上段はくびれ部付近、前方部前面両方において下段と比較して極端に低い。葺石は、非常に良好な状態で確認された。上段平坦面、下段テラスにはそれぞれ敷石が施されており、上段平坦面には直径約3cmの小礫が、下段テラスには直径約10cmの礫が敷かれている。上段斜面、下段斜面、墳端には明確な区画列石、根石列がみられる。全体に丁寧に葺石が葺かれているが、くびれ部を堺に前方部側と後円部側では葺石を構成する礫の大きさが異なり、前方部側では直径約15cm程度の葺石が、後円部側では直径約20cm程度の葺石が使用されている。

墳端は後円部、前方部の調査区すべてで検出されており、約20cmの砂岩の円礫で根石列が設けられ、そこから傾斜変換し、周囲に幅約0.6mテラスが巡る。後円部側のテラスには直径約15cm程度の円礫や角礫で敷石が施されている。周溝は後円部の周囲で明確に残り、幅約4.2m、深さ20cmを測るが、周溝外縁は14cで15cmの立ち上がりが見られ、本来的には後円部の周溝外縁もそのような状況であったと考えられる。ただし、くびれ部あたりでは周溝の状況は変わり、周溝幅は20m程度あるものの深さは20cm程度とごく浅く、墳端周囲に最深部を持ち、そこから外縁に向けて緩やかに上っていく状態で、明確な縁を捉えることも難しい。また、前方



第12図 15年度14号墳調査位置図 (1/900)

部前面では、ココスヤシの植栽により著しく削平されているものの周溝は確認されず、前方部前面には巡らないと考えられる。

また墳丘以南で削平が著しく一部分の残存であるが、竪穴住居を一軒検出した。埋土中から弥生土器片を数点出土した。

遺物は土師器碎片が多数墳丘斜面で出土したほか、前方部上段平坦面で元位置を留めた状態で壺形埴輪を3個体出土した。埴輪基底部から約80cm程度の間隔をおいて、それぞれの底部片に一つずつ円礫がのった状態で出土した。底部片は樹立の状況は見られなかったが、樹立痕と考えられる直径約35cm、深さ約5cmの掘方が認められ、築造当初は、掘方に挿しこんだ後に、円礫を重石にして樹立していたと考えられる。壺形埴輪はその底部整形の状況が生目5号墳のものに共通する形態を呈するが、生目5号墳では円筒埴輪も伴っていることから、生目5号墳築造以前の前方後円墳集成編年4～5期に相当すると考えられる。

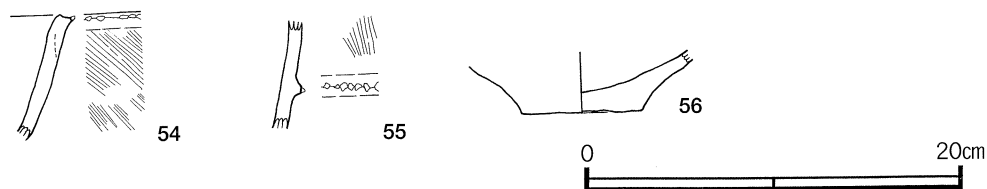
2. 平成15年度の調査結果

14e

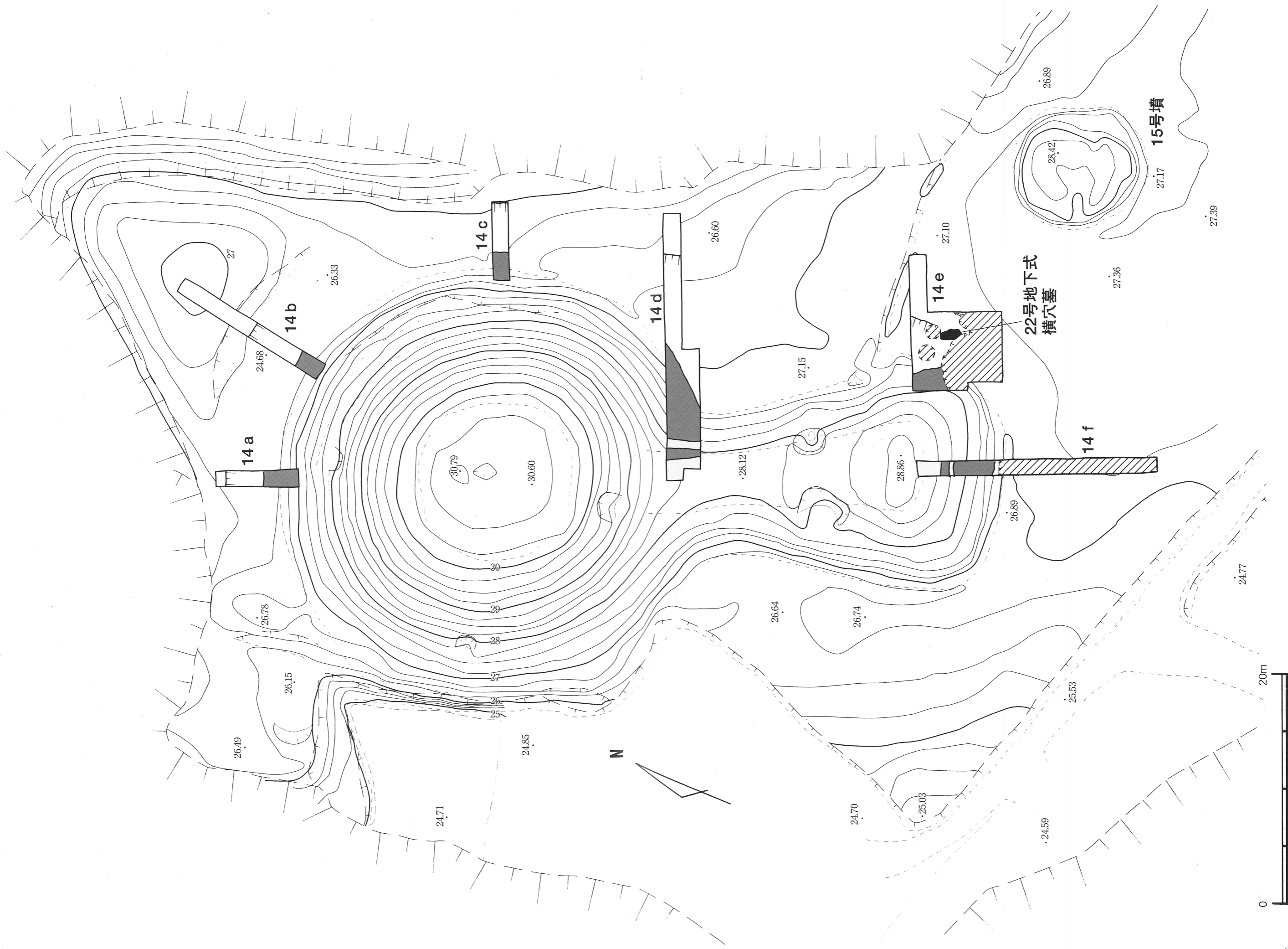
東側隅角付近の前方部側面とその周囲に面的に設定した。調査区内の多くは植樹による攪乱が多く、特に周溝部分では著しかった。前方部側面の墳丘は良好に検出され、下段斜面葺石が良好な状態で確認でき、墳端には直径30cm程の砂岩の円礫を横位に配置する根石列が巡る。しかし、隅角は植樹により削平され、検出できなかった。周溝は攪乱される部分が多いものの、隅角に向け収束する傾向が見られ、前方部前面で周溝が確認されなかった結果も加味すると、前方部前面側には巡らない可能性が高い。

出土遺物は調査区内の攪乱途中や、基本層序Ⅲ～Ⅳ層内から弥生土器片(54～56)が出土しており、中期中葉～中期末の時期が与えられる。

隅角に近い前方部側面側の周溝外縁付近では、地下式横穴墓(22号)が確認された。今回の調査では竪坑の半裁のみであったため、詳細は不明であるが、墳丘側に竪坑を外側に玄室を設ける。竪坑は長方形を呈し長軸1.9m、短軸0.8m、深さ65cmを測り、長辺の一辺から玄室を設けている。竪坑内から遺物は出土していない。14号墳被葬者に追従する者の墓と考えるならば、前方後円墳集成編年4～5期に相当する時期に遡ることも考えられる。



第13図 14e 出土遺物 (1/4)



第14图 14号墳全体图 (1/300)

第VI章 22号墳の調査

1. 調査以前の環境

古墳群の南側に位置しており、現況で墳長117mを測る前方後円墳で古墳群内第3位を誇る。墳丘の南には深さ10m程の掘割状に造られる市道「跡江沖田線」が前方部を横切っており、墳丘が切断される。墳丘上には現在アラカシ、スダジイ、マテバシイ、周溝内にはスギ、モウソウダケ、メダケ、果樹園として使用されていた当時の柿の木などが見られる。

2. 平成16年度の調査結果

今回は22号墳の整備にあたり、前方部を横切る市道にボックスカルバート（以後、BC）を設置し、BC上に切られた墳丘を復原する計画のもとBCの延長を決定する上で、墳丘の形態・規格を確認するため、前方部の各所に調査区を設定した。

22A

前方部東側面の周溝部分に設定した調査区である。墳端付近は一部で墳丘斜面の葺石を確認したものの削平により、明確な墳端を捉えることはできなかった。この付近での周溝幅は0.0mを測る。側面中央部の周溝内からは溝に囲まれる張り出し部が確認された。溝は「コの字」状に走り、前方部に平行する側には走らない。最大幅2.0m、最大深36cmを測り、墳丘側からその反対側に向かって下る。北東部は削平される。張り出し部は溝周囲の本来の周溝よりも一段高く、地山を整形して造られており、22号墳本来の施設であることが窺える。張り出し部は長軸4.0m、短軸2.7m、基底部からの高さが30cmを測る。張り出し部周囲の溝内からは溝南側で土師器の壺形土器、高坏が出土しており、溝北側で小型丸底壺1点が出土している。

周溝外縁では地下式横穴墓（23号）が確認された。検出のみであるため、全様は不明であるが、地下式は生目7号墳等で確認された地下式と同様に周溝外縁の立ち上がりを利用して造られたタイプで、豎坑上に封土を設ける。

22B

前方部西側面の一段面斜面から周溝外縁にかけて設定した調査区である。調査の結果、墳丘一段目の斜面から墳端にかけては大きく削平され、葺石も遺存しない。調査区西端では周溝外縁に向かって大きく立ち上がる状況がみられるがその先には崖が控えており外縁の検出は断念した。現状で周溝は幅8.2m、深さ75mを測る。周溝底面付近では墳丘斜面で葺石を構成していた5～30cm程の砂岩の円礫が多数出土しており、同時に壺形土器の破片が数点出土している。

22C

前方部東側面付近に設定した。墳丘では直径5～15cm程の砂岩の円礫を横位に充填する良好な葺石が残り、基底部の根石列も直径15～25cm程の砂岩の円礫で配置する。また、墳端の周囲には直径5～10cm程の砂岩の円礫を配する敷石帯が遺存幅0.3mで巡るが、端部は削平を受ける。周溝外縁は調査区の東端で見られ、幅8.5m、深さ50mを測り、やはり外縁部分が高さ50cmで立ち上がる。また、周溝の一部で幅1.8mで周溝外に向かって広がる部分が見られるが、今回の調査でその性格を明らかにすることはできなかった。周溝内からは多量の弥生土器片（概ね中期末か）が多数出土しており、周溝内にも柱穴と考えられる遺構が多数みられる（未掘）。周溝は当初、生目5号墳などでみられるように隅角付近で収束するタイプであると考えられたが、その状況は見られず、前方部前面にも巡っていた可能性が高い。

22D・E

市道を挟んだ南側に設定した調査区である。調査以前、22号墳は前方部を市道によって大きく切られているという認識があった。そのため、当初は墳端確認のため調査区を設定した。

前方部前面の主軸ライン延長上の墳端から外に向けて22Dを、側面に22Eを設定した。

調査の結果、墳丘状の高まりは墳丘でないことが判明した。調査の状況は、8号墳の周辺(8A、8B)、10号墳の結果と同様に、Th-Sを含む黒色土層の上位にシラス土を主体とする土を配しており、古墳とはなんら関係のないものであることが解った。おそらくは、8号墳周辺、10号墳と同様の原因によりもたらされたものだと判断され、実に紛らわしい位置にあることから、これまで墳丘の一部として扱われていた。22Dでは弥生中期末の竪穴住居と考えられる遺構を検出しており、22Cで確認されたものも同様にこの一帯は南東側約200mに位置で確認された中期の環濠集落に石ノ迫第2遺跡の一部分であると考えられる。

出土遺物(第18図)

57~64は22Aで、65は22B、66、67は22Cで出土した遺物である。

57~63は張り出し部周囲の溝内から、65は溝側辺(22号墳周溝)から出土している。57は長胴の短頸壺で丸底気味の平底を呈する。肩から口縁部にかけては強く屈曲し、口縁部は直線的に外に開く。58~62は布留系の高坏である。脚柱部はすべて同様の形態を呈し、長く伸びるが僅かにエンタシス状になる。裾部へは稜を持って強く開く。裾部はほぼ直線的になるが、59は僅かに内湾気味に、60は僅かに外反気味になる。59、61、62の脚注部内面はナイフ状の工具で横方向に一回転させたようなケズリの痕跡が見られ裾部内面との間に稜が立つ。坏部は比較的浅く、受部と口縁部の稜は低い位置にあり、口縁部は直線的に大きく開く。外面は基本的にミガキを施すが、60の坏部はヨコナデを施す。

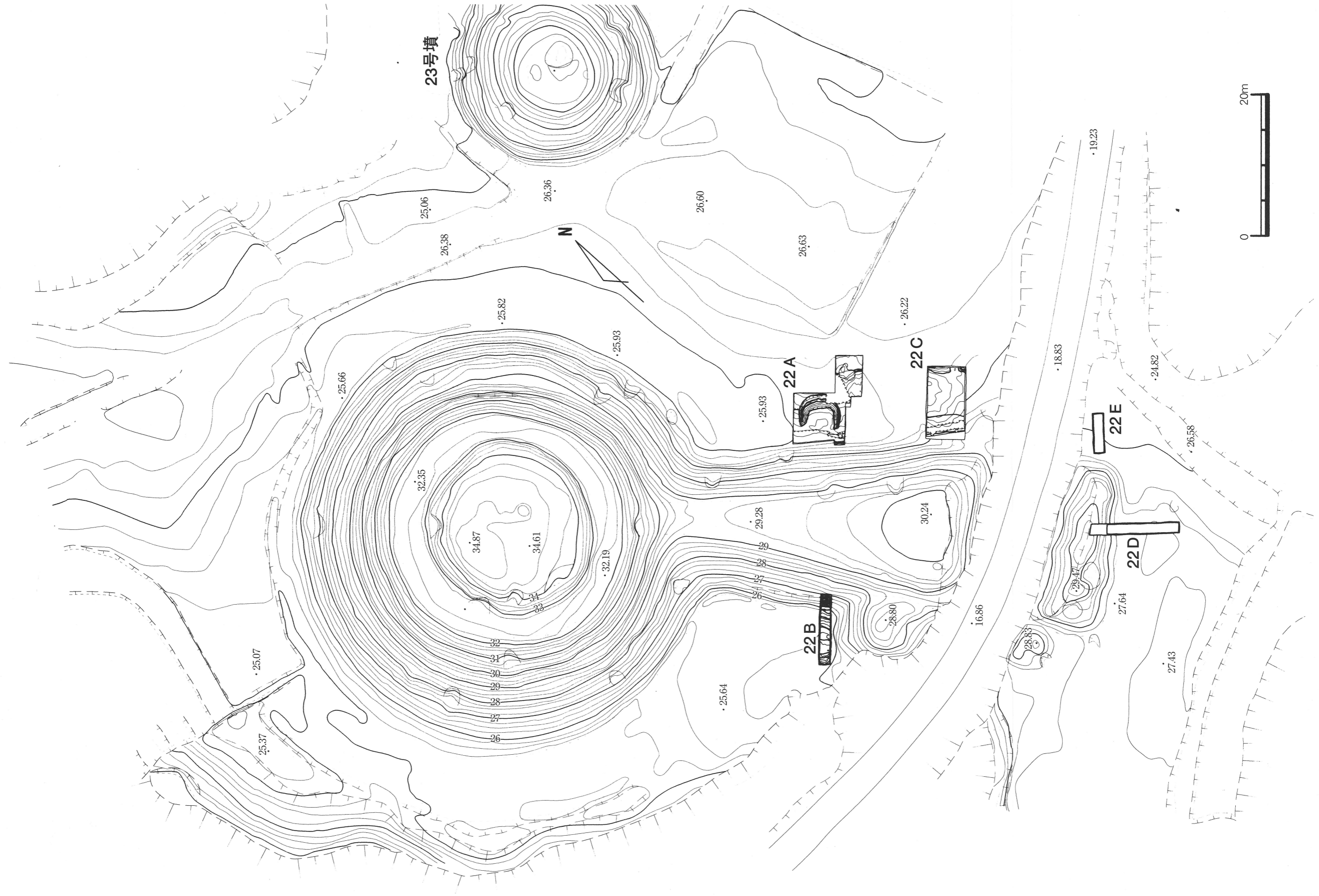
63は小型丸底壺で、扁球形の胴部を持つ。口縁部は屈曲して開き、口縁部径が胴部径を僅かに凌ぐ。丸底を呈する。内外面ともナデ調整である。

64、65、66は壺形土器で、64、65は共に肩が張り、上に向かって屈曲した後、複合口縁を呈する可能性がある。64は球体の胴部を持ち、残存が悪いが焼成前に削り貫いて底部穿孔を行っており、復元で直径2.5cmの小さい穿孔である。壺形埴輪であると考えられる。この他、胴部には内外面に穿孔を施す。残存部分で外面からは肩部付近に1孔、胴部中位付近に1孔、内面からは胴部下位に1孔、そして、胴部下位に貫通する穿孔を1孔施す。特に規則性は見られない。66は壺形土器の肩部で外面に線刻を施す。焼成前に描かれており、切妻型の屋根構造に、棟持柱を表現していると考えられる。弥生土器の可能性もある。

22号墳築造時に構築されたと考えられる張り出し部に57~64は伴っており、22号墳の構築時期を確認できる一括資料である。高坏は概ね布留3式併行(寺沢1986)、松永編年6期(松永2004)に、肩の張る壺64は竹中編年2期に比定され、生目14号墳(集成4~5期)出土の壺形埴輪に比べ、底部形態が古い様相を示す。このため、22号墳は現段階で前方後円墳集成編年の3~4期前半の時期として位置付けておきたい。

従来22号墳は市道によって、前方部を切られる墳長117mの柄鏡形前方後円墳という認識がされていた(集成4期)。今回の調査で市道南側に延びる高まりは古墳に伴わないものであることが判明した。本来の墳端は、市道に面する墳丘斜面でピンポールでハンドボーリングを行った結果、葺石と考えられる反応があり、前方部前面を確認することができた。前方部前面の斜面は平坦面の法肩から幅3.5~5.0mで遺存するが、墳端と前面側の周溝は市道によって切られる。そのため、墳端推定位置と前方部前面の主軸付近傾斜角をもとに復元すると墳丘を3m強削平されていると考えられ、その復元形から得られた墳長は101mになり、生目3号墳と相似形の平面形になる。3号墳は以前の調査でも墳丘伴う遺物が出土していないが、22号墳の調査結果より、3号墳は22号墳の前後の時期として位置づけられることとなった。

また前方後円墳に寄生する地下式横穴墓は古墳群内で6例目(3, 5, 7, 14, 21号墳)となるが、その構造も他の例にあるように周溝外縁の立ち上がりの斜面を利用している。この地下式横穴墓が22号墳被葬者に追従する者の墓であるならば、4世紀代に遡る可能性がある。



第15图 22号墳全体图 (1/500)